

サード・エイジャーのライフスタイルとテレビ視聴
—中国新疆ウイグル自治区における住民調査に基づいて—
Lifestyle and Television viewing of the Third Ager:
Based on The field research Xinjiang Uygur Autonomous Region, China.

シャザディグリ シャウティ
夏扎提古丽・沙吾提
Xiazhatiguli Shawuti

株式会社インテージ INTAGE Inc.

【要旨】この研究の目的は、ライフスタイルがサード・エイジャーのテレビ視聴行動にどのような影響を与えているのかを明らかにすることである。新疆ウイグル自治区において、4つ市（都市地域）と8つの県（郡部）における18,070人を対象に、2008年5月から6月にかけて自記式留め置き調査を実施した。有効回収票は11,209票である。生活行動と社会観に関する約150の項目を用いて、主成分分析とクラスター分析によってライフスタイルを8つに類型化した。これらの類型をライフスタイル変数として、テレビ視聴時間と番組選好へ与える影響を見るために重回帰分析を行った。その結果、サード・エイジャーのテレビ視聴行動には、性や年齢、地域的特性、民族、家計、学歴、社会関係等といった人口学的・社会的属性変数よりもライフスタイル変数が大きな影響を与えていることがわかった。

【キーワード】ライフスタイル、テレビ視聴、番組選好、サード・エイジャー、中国

1. 問題の所在と目的

本研究は、ライフスタイルがサード・エイジャーのテレビ視聴行動に及ぼす影響を明らかにすることを目的としている。日本でも中国でも、高齢者は自由時間の多くをテレビ視聴に当てていることが明らかにされている(王琪延, 1999; 马惠娣, 2002; 香取, 2001; 小田, 2004; 夏扎提古丽, 2006a)。また、中国新疆ウイグル自治区の高齢者を対象として行った調査研究では、テレビ視聴行動は、性や年齢、地域、民族、家計、学歴、社会関係等によってかなり異なることが明らかにされている(夏扎提古丽, 2006b; 夏扎提古丽・横井, 2007; 夏扎提古丽・小田, 2007a; 夏扎提古丽・小田, 2007b; 夏扎提古丽・小田, 2007c; 夏扎提古丽・小田, 2008)。しかしながら、ライフスタイルの観点からテレビ視聴行動にアプローチした研究は、中国や日本はもとより諸外国においても例を見ない。

ライフスタイル研究は、マーケティングの領域を中心に発展してきたが、近年では高齢者研究を含むさまざまな領域でライフスタイルの観点からの研究が進められており、メディア研究においてもライフスタイルに着目した研究が試みられている。しかしながら、高齢者研究においては主に健康問題との関連でライフスタイルが取り上げられており、社会老年学の領域においてもライフスタイル研究は緒に着いたばかりである(Hendricks and Hatch, 2006)。また、メディア研究では、ポケットベルや携帯電話、インターネットなどのニューメディアの利用とライフスタイルの関係に関心がもたれてきたが(Novak, 1990)、テレビ視聴行動とライフスタイルの関係に焦点を当てた研究は見られない。

ところで、高齢期を心理社会的発達の最終段階としてではなく、生涯発達論的観点から人生を4区分したときの達成・充実・完成の期間であるサード・エイジの一時期としてとらえる考え方がある(小田, 2004)。サード・エイジャーとは、その期間にある人々を指す。サード・エイジの概念は暦年齢を基準としたものではないが、便宜的に40代あるいは50代以降を指すなど、いわば中高年の代名詞として使われることも多い。中高年層の生活が多様化している今日、現在およびこれから高齢者／高齢化問題を究明していく上で、高齢者層に限定することなく、サード・エイジャーを対象とすることがどの研究領域にとっても意義あることであると考えられる。

2. 研究の枠組みと方法

(1) ライフスタイルの概念と測定尺度

テレビ視聴行動が人口学的・社会的属性に左右されることは既に述べた通りであるが、マーケティング研究において購買行動が性別や年齢、職業、所得などの違いよりも、ライフスタイルの違いによって、より大きく左右されることを明らかにしてきたように、テレビ視聴行動という消費者行動にもライフスタイルが大きく影響していると考えられる。そこで、本稿では、ライフスタイルがテレビ視聴行動に及ぼす影響の大きさを人口学的・社会的属性との比較から明らかにする。このとき、ライフスタイルの概念をどのように定義するかが課題になる。

ライフスタイルの概念と測定尺度に関してはこれまでも数多くの議論と提案があるが、未だにゴールデン・スタンダードとみなされるものはない。しかし、共通するところは、ライフスタイルは活動(activity)と興味・関心(interest)、態度・意見(opinion)によって形成される生活パターンと見なされていることである。そこで、本稿では、日常生活行動と社会観(現代社会に対する態度・意見)からライフスタイルを類型化し、測定尺度を作成することにする。興味・関心に関しては、それが行動となって現れるときに、その個人の生活パターンを形成すると考え、あえて独立させることをせず、その代わりに多様な日常生活行動をとりあげることにする。

(2) 調査対象地域の概要とサンプリング

新疆ウイグル自治区(ウイグル語: Shingjang Uyghur aptonom rayoni)は、中国の最西部に位置し、面積は165万km²と中国の省・自治区の中で最大であり、中国全土の約1/6を占める(日本の約4.5倍)。総人口は約2,008万人で、漢民族39.6%、ウイグル族45.9%、カザフ族7.0%、回族4.4%、モンゴル族0.9%のほか、キルギズ族、シボ族、タジク族、ウエズビク族、タル族などの44民族からなる多民族自治区である。高齢者人口は187万人で、全人口の9%を占め、毎年4.4%増加している(都市報、2008)。

中国における高齢者あるいはサード・エイジャーを対象としたテレビ視聴行動の研究は緒についたばかりであり、とくに新疆ウイグル自治区においては、それらに関する基本的データさえ十分に蓄積されていない。そこで、本研究では、新疆ウイグル自治区を代表するサンプルを抽出するために、民族構成と地域性格(都市的か農村的か)、経済的差異等から、以下のような方法で調査対象地域を選定した(表1)。

区都ウルムチに関しては8つの行政区から乱数を用いて天山区と沙区を抽出した。トルファンは歴史が古い地域で、ウイグル族が75%を占めている。ここには、トルファン市とトクスン県、ピチャン市がある。この3地域の中から乱数を用いてトルファン市とトクスン県を抽出した。

イリカザフ族自治州はカザフ族の副省級自治州であり、民族構成はカザフ族が25.5%、漢族が45.2%、ウイグル族が15.9%を占め、総人口は411万人である。ここには2つの市と8つの県がある。これらの中から乱数を用いてイリ市とイリ県を抽出した。ホータン地区には1つの市と8つの県がある。ホータン地区の場合は、県間の経済的差異や民族構成の違いが他地域に比べて大きいことから、1市6県を乱数を用いて抽出した。

以上のようにして抽出した13地域において、各地域の高等学校を1～3校を乱数を用いて抽出し、それらの高校を通じて調査を依頼した。調査に当たっては、新疆ウイグル自治区ウルムチ市教育局、トクスン県教育局、トルファン地区教育局、イリ地区教育局、ホータン地区教育局の全面的な協力を得た。なお、ウルムチの2つの区とトルファン市、トクスン県、イリ市、イリ県に関しては、その地域の教育局の意向に従って、それぞれの地域におけるすべての高校を対象にした。その結果、配票数は18,070になった。

(3) 調査の方法

抽出された高校の2年生の祖父母世代と親世代を調査対象者にした自記式留め置き調査を行った。こうした方法を採用したのは次のような理由からである。一つは利用可能なサンプリング台帳がなかったことと、二つには

表1. 調査対象地域の人口と標本数

		人口 (万人)	標本数 (人)
ウルムチ市	天山区	193	2,537
	沙区		1,801
トルファン地区	トルファン市	26	1,372
	トクスン県	11	360
イリ地区	イリ市	43	1,518
	イリ県	38	1,311
ホータン地区	ホータン市	28	266
	カラカシュー県	47	307
	グマ県	24	320
	ロブ県	22	241
	チラ県	14	258
	ケリヤ県	23	598
	ニヤ県	4	320
計		473	11,209

注:「新疆統計年鑑」(2007)より作成。市は都市地域、
県は郡部。ウルムチ市の人口は総人口

自記式調査票に関わる問題からである。『中国人類発展報告』(2005)によると、2000年に行われた調査では、新疆ウイグル自治区の成人で学校教育を受けたことのある割合は62%にとどまっており、高齢者世代では識字率がかなり低いことが推察される。そのため、祖父母世代が対象となる場合、自記式調査では調査に回答することを敬遠する人や調査に回答できない人が多くなる。そこで、子どもまたは孫に当たる高校2年生が質問票に従って祖父母や親に対して聴き取り調査をすることを依頼した。その際、高校生には次のようにして回答者を1人に限定するように依頼した。まず、高校生が聞き取る対象者を性別・年代別で区別し、その優先順を、男子は、祖父→祖母→父→母、女子は、祖母→祖父→母→父の順にした。両親より祖父母を優先することで高齢者の回答者を少しでも多くするとともに、また祖父母がいない場合には中年層である両親を回答者とすることですべての高校生が必ず一人の回答者を得ることになる。そして、男女で祖父母または両親のうち同性の対象者を優先することにより、対象者の優先順位を明確にするとともに、対象者の性別の偏りをなくすようにした。

以上のような手順で回収したサンプルは11,327であり、そのうち有効サンプルは11,209である。性別は男性5,250人(46.8%)、女性5,959人(53.2%)で、年齢は最小が36歳、最大が89歳で、平均は54.1歳、標準偏差は14.2歳である。ちなみに、5歳階級別では、36~39歳317人(2.8%)、40代6,375人(56.9%)、50代1,307人(11.7%)、60代1,096人(9.8%)、70代1,076人(9.6%)、80代1,038人(9.3%)と50代が少なめで高齢世代が多めになっている。これは、既に述べたように、高齢世代のサンプルを確保するために両親よりも祖父母世代を優先したためであるが、結果的には各世代を層と見なした場合の層ごとの必要サンプル数を満たすことになった。

(4) ライフスタイルの測定項目と測定尺度

a. 日常生活行動の項目

日常生活行動は、小田(2004)の生活行動に関する113項目のうち、中国新疆の人々の生活行動にも適用できる106項目を選び、新たに、「礼拝をする」、「モスクに行く」、「子供へのkurban yet プレゼント」などの15項目を加えた。各項目の選択肢は、「よくする」、「時々する」、「殆どしない」、「全然しない」の4件法で、それぞれに4~1を配点した。それらを主成分分析によって13の生活行動類型に集約し、それぞれの類型を構成する項目の合成得点を各生活行動類型の測定尺度にした。また、生活行動項目のうち、社会参加に関しては、以上の13類型とは別に、各種集団・組織への関わりの程度を社会参加度とする1類型を用意し、「加入しており、いつも活動に参加している」、「加入しており、時々活動に参加している」、「加入しているが、たまにしか活動に参加しない」、「加入しているが、活動には参加したことはない」、「加入していない」の5件法で質問し、それぞれに5~1を配点した。

b. 社会観の項目

小田(2004)で取り上げられている社会観の測定尺度に関する46項目のうち、同調、伝統的権威主義、儀礼主義に関する項目、社会的扶養と私的扶養に関する項目、身近な生活空間としての地域に関する項目を本研究での社会観の測定項目とした。

(5) テレビ視聴行動に関する測定項目

テレビ視聴行動に関しては、視聴時間と番組選好を取り上げる。番組に関しては、中国中央テレビ局(CCTV)の13チャンネルの番組表と新疆ウイグル自治区テレビ局の12チャンネルの番組表、ウルムチ市テレビ局とトルファン地区テレビ局、伊里市テレビ局、ホータン地区テレビ局などの番組表を参考に45種類に分類し、それらについて、「好んで、よく見る」、「時々見る」、「ほとんど見ない」、「見たことがない」の4件法で回答を求めた。その回答を主成分分析によって、①教養・啓発番組、②報道解説・特集番組、③音楽番組、④娯楽番組、⑤ドラマ・映画、⑥学習番組、⑦ニュース番組等の7類型に集約した。

(6) 分析の方法

生活行動14類型と社会観6類型を用いてライフスタイルを類型化する際に、各類型の得点を平均0、分散1になるように標準化した。そして、それらを用いてクラスター分析を行った。有効回答票が1万を超えるために階層的クラスター分析でケースをもとにクラスター数を検討するのが困難であったために、事前にクラスター数を5から12の範囲で決め、K-means法によるクラスター分析を行った。そして、析出されたクラスターを用いてライフスタイルがサード・エイジャーのテレビ視聴行動にどのような影響を及ぼしているかをテレビ視聴時間と番組選好度を従属変数として、人口学的・社会的属性等とライフスタイルを独立変数とする重回帰分析を行った。その際、カテゴリ変数に関してはダミー変数を用いて量的変数に変換した。

3. 結果

(1) ライフスタイルの類型

生活行動14類型と社会観6類型を用いたK-means法によるクラスター分析の結果、クラスター間の相違がより明瞭になったのは、生活行動類型のうちの交友行動と社会参加、社会観類型のうちの伝統的権威主義的態度と同調態度の計4類型を変数として用いてクラスター数を8つにした場合であった(表2)。

表 2. クラスタ分析によるライフスタイルの 8 類型

類 型 変 数	閉鎖型	反抗孤立型	積極型	同調伝統型	現代都市型	大衆型	孤立型	反抗型
同 調	-0.09670	-1.81754	1.08414	1.03650	0.15117	-0.10435	0.10608	-1.28522
伝 統	-0.42968	-1.28087	1.13035	1.24996	-1.31118	0.23309	-0.11814	-0.81212
交 友 行 動	0.30806	-1.04784	1.00198	0.26624	-0.56114	0.07728	-1.66648	0.29107
社 会 参 加	-1.22060	-1.12124	1.05119	-0.99751	0.48488	0.69582	-0.92341	0.27492
サンプル数	1,513	698	1,842	806	764	2,479	980	1,111

N=10,193

表中の数値は、各クラスター内の各変数に対する平均値である。標準化されたデータを用いているので、正負の方向と大きさで、各クラスターに名称を与えた。そして、それらをライフスタイル変数にした。

(2) テレビ視聴時間を規定する要因

ライフスタイルがサード・エイジャーのテレビ視聴時間や番組選好にどのような影響を与えているのかを明らかにするために、これまでに多くの研究でメディア接触行動に影響する要因として指摘されてきた諸要因とライフスタイル変数を用いて、強制投入法による重回帰分析を行った結果が表 3 である。なお、ライフスタイル変数はカテゴリ変数であるので、「反抗型」を基準カテゴリにしたダミー変数を用いて量的変数に変換した。また、以下の変数もダミー変数である(括弧内は基準カテゴリ)。性別(女)、民族(ウイグル族)、職業(無職)、自由時間(ない)、一人で過ごす(誰かと過ごす)。視聴時間は全く見ないを 0 分とし、30 分は 30、1 時間以内は 60 分というように 60 分刻みにし、8 時間以上を 540 分とした。平均は 120 分で、標準偏差は 101 分である。

モデル I は、人口学的・社会的属性と自由時間、自由時間を誰と過ごしているかなどライフスタイル変数を加えないときのテレビ視聴時間を説明するモデルであり、モデル II はそれにライフスタイル変数を加えたモデルである。

モデル I からは、テレビ視聴時間を左右する主たる要因は「一般社員・職員」、「自営業」、「アルバイト・パート」といった職業に関連するものであることや、「年間所得」や「一ヶ月の生活費」が高いほど、「就学年数」が多いほど長くなること、そして、民族や年齢、居住地域の特性は有意な影響を与えていないことがわかる。モデル II からは、ライフスタイル変数、中でも「閉鎖型」ライフスタイルと「孤立型」ライフスタイルがテレビ視聴時間に対する影響力の大きな促進要因になっていることがわかる。

モデル I、II ともに、重相関係数の大きさからいって説明力がごく小さく、ライフスタイル変数を投入した場合でも説明力が顕著に上昇するわけではないが、テレビ視聴時間に影響する要因を考えると、ライフスタイルの観点を導入することの意義は小さくはないと言える。

(3) 番組選好度を規定する要因

表 4 は、番組類型ごとにライフスタイル変数を投入しない場合(モデル I)とそれを投入した場合(モデル II)の 2 つの重回帰モデルによる分析結果である(強制投入法)。この結果を一目見てわかることは、ライフスタイル変数を投入したことにより、どの番組類型においても、重相関係数の変化に見られるように、説明力が大幅に上昇していることである。そして、音楽番組を除くと、他の番組類型では、いずれもライフスタイル変数の標準化係数が他の変数のそれよりも大きくなっている。このことは、テレビ視聴時間の分析では見られなかったことである。要するに、ライフスタイルが、どれだけ長い時間テレビを見るかということにではなく、どのような番組を見るかということに強く影響を与えているということである。

表 3. テレビ視聴時間の重回帰分析

変数名	モデル I	モデル II
男	-0.086	-0.053
漢民族	-0.002	-0.007
都市部ダミー	-0.014	-0.006
一般社員・職員	-0.149	-0.102
公務員	-0.067	-0.045
自営業	-0.119	-0.064
アルバイト・パート	-0.121	-0.118
年間所得	0.083	0.094
一ヶ月の生活費	0.048	0.068
就学年数	0.086	0.064
年齢	0.002	0.035
自由時間がある	-0.047	-0.024
一人で過ごす	-0.063	-0.07
閉鎖型		0.149
反抗孤立型		0.057
積極型		-0.053
同調・伝統型		0.028
近代都市型		0.044
大衆型		-0.054
孤立型		0.119
調整済みR2乗	0.048	0.094
F 値	24.482	30.639

注：数値は標準化係数。網掛け部分は p < .05。多重共線性の統計量 VIF はすべての変数について 2.6 未満。

表 4. 番組選好の重回帰分析

モデル	変数名	教養啓発番組	ニュース番組	音楽番組	報道解説特集番組	娯楽番組	ドラマ映画番組	学習番組
モデル I	男	0.086	0.096	0.069	0.134	0.039	0.011	-0.086
	漢民族	-0.020	-0.034	-0.040	-0.021	-0.019	-0.035	-0.002
	都市部	0.019	0.012	0.027	0.018	0.013	0.000	-0.014
	一般社員・職員	0.159	0.039	0.140	0.135	0.172	0.145	-0.149
	公務員	0.233	0.156	0.218	0.182	0.248	0.151	-0.067
	自営業	0.098	0.038	0.077	0.111	0.137	0.042	-0.119
	アルバイト・パート	-0.018	0.022	-0.040	0.006	-0.005	-0.009	-0.121
	年間所得	-0.034	-0.075	-0.025	-0.085	-0.062	-0.019	0.083
	一ヶ月の生活費	0.058	0.012	0.032	0.052	0.053	-0.011	0.048
	就学年数	-0.040	-0.073	-0.092	-0.018	-0.077	-0.055	0.086
	年齢	0.027	-0.034	-0.023	-0.003	-0.010	-0.047	0.002
	自由時間がある	0.079	0.149	0.058	0.120	0.095	0.044	-0.047
	一人	0.035	-0.020	0.056	-0.001	0.046	0.053	-0.063
	調整済みR2乗	0.077	0.063	0.073	0.076	0.080	0.070	0.070
F値	36.132	32.515	38.951	39.610	41.535	36.792	36.792	
モデル II	男	0.051	0.079	-0.046	-0.120	-0.023	-0.017	0.044
	漢民族	-0.004	-0.037	0.026	0.012	0.005	-0.037	-0.013
	都市部ダミー	0.007	0.003	-0.011	-0.003	-0.003	-0.008	0.009
	一般社員・職員	0.098	0.028	-0.086	-0.106	0.085	0.128	0.026
	公務員	0.139	0.096	-0.122	-0.150	0.173	0.103	0.121
	自営業	0.064	0.025	-0.045	-0.082	0.029	0.037	0.038
	アルバイト・パート	-0.018	0.068	0.084	-0.016	-0.038	0.023	-0.063
	年間所得	-0.008	-0.045	0.014	0.032	0.014	0.038	-0.009
	一ヶ月の生活費	0.000	-0.001	0.002	-0.021	0.008	-0.027	0.005
	就学年数	0.021	-0.065	0.018	0.004	-0.042	-0.045	-0.009
	年齢	-0.008	-0.071	0.077	0.035	-0.062	-0.066	-0.034
	自由時間がある	0.063	0.124	0.014	-0.079	0.047	0.043	0.014
	一人	-0.018	-0.034	-0.019	0.027	-0.008	0.049	-0.008
	閉鎖型	0.003	0.181	0.130	-0.116	0.147	0.258	-0.188
	反抗孤立型	-0.123	-0.083	0.169	0.134	-0.096	-0.085	-0.160
	積極型	0.404	0.346	-0.217	-0.323	0.310	0.402	0.321
	同調・伝統型	0.124	0.201	-0.074	-0.192	0.163	0.247	0.034
	近代都市型	0.000	0.051	0.024	-0.028	0.004	0.112	0.014
	大衆型	0.166	0.115	-0.061	-0.120	0.121	0.148	0.189
孤立型	-0.108	0.011	0.182	0.095	-0.062	0.061	-0.112	
調整済みR2乗	0.288	0.185	0.218	0.248	0.189	0.205	0.304	
F値	92.034	52.122	63.711	75.449	53.658	58.966	99.387	

注：各欄の数値は標準化係数。網掛け部分は $p < .05$ 。多重共線性の統計量VIFはすべての変数について2.6未満。

4. 要約と結論

本稿では、ライフスタイルがサード・エイジャーのテレビ視聴行動にどのような影響を与えているのかを明らかにするために、8つに類型化したライフスタイル変数とこれまでに多くの研究で取り上げられてきた要因を用いて重回帰分析を行った。その結果、以下のようなことが明らかになった。

これまでに新疆ウイグル自治区で実施された調査研究では、高齢者のテレビ視聴行動を見ていくときに性や年齢、地域的特性、民族、家計、学歴、社会関係等による差異を無視できないという知見が得られていたが、ライフスタイルの観点を導入した今回のテレビ視聴時間と番組選好の分析から、それらの差異よりもライフスタイルの違いの方がテレビ視聴行動に大きな影響を与えていることがわかった。例えば、「娯楽番組」選好に関して、人

口学的・社会学的属性変数と自由時間に関する変数だけを用いた分析では、「都市部」であることが「娯楽番組」選好を促進する要因になっているが、ライフスタイル変数を加えて分析した結果は、「都市部」であることは番組選好に有意な影響を与えていない。

また、サード・エイジャーのテレビ視聴行動を民族別で説明するより、ライフスタイル変数を用いて説明する方が、モデルの説明力が高く、テレビ視聴行動においてライフスタイルを用いて説明することの有効性が明らかにされた。具体的には、テレビ視聴時間や「教養・啓発番組」、「報道解説・特集」番組、「娯楽番組」、「学習番組」において民族による差異が認められなかったが、殆どのライフスタイル変数が番組選好に有意な影響を与えている。ライフスタイル変数を投入しないで分析したときに民族が有意な影響を与えたとしても、ライフスタイル変数を加えてから分析すると、有意な影響を与えていなかった。例えば、「娯楽番組」選好に関して、人口学的・社会学的属性変数と自由時間に関する変数だけを用いた分析した時に、「漢民族」であることが「娯楽番組」選好を阻害する要因になっているが、ライフスタイル変数を加えて分析した結果、番組選好に有意な影響を与えていなかった。そして、ライフスタイル変数を加えて分析したときに民族が有意な影響を与えた場合でも、その影響がきわめて弱いことが明らかにされた。例えば、「ニュース」選好と「ドラマ・映画」選好に関して、「漢民族」であることが、人口学的・社会学的属性変数と自由時間に関する変数だけを用いた分析した時でも、そしてライフスタイル変数を加えて分析した結果でも、民族が「娯楽番組」選好を阻害する要因になっているが、その標準化偏回帰係数は非常に小さく、どのライフスタイル変数の標準化偏回帰係数よりもかなり低い値になっている。

以上のように、サード・エイジャーのテレビ視聴行動が諸他の要因にもましてライフスタイルによって左右されることが明らかにされた。このことは、従来のような変数だけで視聴者を分類することの限界が明らかにされたことを意味すると考える。そして、また、このことは、高齢化社会における番組を考える上で、各テレビ局や番組制作者がサード・エイジャーのライフスタイルに着目することの意義が大きいことを物語っているといえる。

残された課題も多い。作成した重回帰モデルの説明力は十分とは言えない。それだけサード・エイジャーのテレビ視聴行動には多様な要因が関係しているということも言えるが、モデルの改善を今後の課題にしたい。また、ライフスタイルはテレビ視聴時間や番組選好に影響を与えるが、テレビ視聴行動がライフスタイルに与える影響も解明されなければならない重要な課題であると考えられる。

【引用文献】

- Hendricks, J. and L.R.Hatch (2006) Lifestyle and Aging, Binstock, R.H. and George, L.K., *Handbook of Aging and the Social Sciences*, 301-319, Academic Press.
- 马惠娣 (2004) 「我国公众闲暇时间文化生活状况的调查与研究」, <http://www.taosl.net/ac/mahd33.htm>.
- Novak, T.P., and B.MacEvoy (1990) On Comparing Alternative Segmentation Schemes: The List of Values and Life Styles (VALS), *Journal of Consumer Research*, 17, 105-109.
- 王琪延(1999)、『中国人的生活時間分配』(中国人の生活時間配分)、経済科学出版社。
- 小田利勝(2004)、『サクセスフル.エイジングの研究』、学文社。
- ウルムチ市人民政府(2008)中国ウルムチ市人民政府ホームページ(<http://www.urumqi.gov.cn>)
- 新疆統計局(2007)、『新疆統計年鑑』(新疆ウイグル自治区統計年鑑資料)、新疆人民出版社。
- 香取淳子(2000)、『老いとメディア』、北樹出版。
- 夏扎提古麗.沙吾提(2006a)、「中国における高齢者テレビ視聴行動研究の主要課題」、『岩手大学大学院人文社会科学研究科紀要』、15:57-75。
- 夏扎提古麗.沙吾提(2006b)、『老年社会与电视(高齢社会とテレビ)』、新疆人民出版社。
- 夏扎提古麗.沙吾提・横井修一(2007)「新疆ウイグル自治区における高齢者のTV視聴の様相—社会調査データの数量化Ⅲ類による解析—」、『Artes Liberales(アルテス リベラレス)』、(岩手大学人文社会科学部紀要)、Vol.79:13-30。
- 夏扎提古麗.沙吾提・小田利勝(2007a)、「ウイグル族高齢者のテレビ視聴行動——中国新疆ウイグル自治区における調査に基づいて」、『神戸大学発達科学部研究紀要』、14(2)33-39。
- 夏扎提古麗.沙吾提・小田利勝(2007b)、「中国ウルムチ市における高齢者のテレビ視聴行動に関する一考察」、『老年社会科学』、29(2):215。
- 夏扎提古麗.沙吾提・小田利勝(2007c)「新疆ウイグル自治区高齢者のテレビ視聴行動」、『第8アジア・オセアニア老年学および老年医学大会優秀論文集』:119-120。
- 夏扎提古麗.沙吾提・小田利勝(2008)、「新疆維吾尔自治区老年人的收视行為」、『中国老年学雜誌』28(24):913-915。
- Plummer, J. (1974) The Concept and Application of Life Style Segmentation, *Journal of Marketing* 38(1):33-7.